



9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30

JAPAN

古今奇詮集野話第二卷

昭和九年

九月十二日

時未

(三) 紀の園守が靈ら一旦白鳥よ化する諸

往古いづきの世する。紀泉のそひ雄れとの園と。山は庄司次郎者と
いふのがよほして見と守る多の家僕日次と接と園とはとし。庄司
津生ぬをまく。平日僕不ぬと外の樂もと要めば。又班より家自
義也。一張の寝らあり。鹿鳴の數矢ごろよあまに射あてどとつま
キ。やうけに皆羽と被で一筆あよ教がる。近村四所れ禽獸。じらよ獲らき
こと參せ。家はうれとく。だらからともたわうとも。はなせり。
庄司次郎象にむく。一族處にひきりる。今へ音同くぐる人和の國人
橋の村旅立人の多く雪若。朝の東北よじうて家を並ます。また真冬
紀の國もあつ。ふはよなうて扶助とをよ。庄司は舟載りて雪を。舟をあみ
せし敵とす。雪をすのすとすとえ。雪原の木を。庄司はびびひて

人求まつて居るといひ勝成のみ。歩みに馬をなべて襷を身に實ふ
の様目よ我が代勧とゆて便なるままで。雪舟が女房小蝶。年三十
生れ清き如り。紡績の業よれどもど夫の衣服よろしくもく賜ふ
き縫ともとなく。糊にこめりうらへ。其居所の取とみゆるといひだ
く。酒持に公成用ひあまびいゆば。絹りたるそののアス内。雪舟が
奥付よりの臺中よりあつてこそと人皆ぞう。夜の次御船を雪舟が乗
一舟行をば。雪舟はびひのひまう。食糞とくも。奴僕ともなれ
ば何をりけせん。妻とも若しく富よきりて須臾よ十餘枚の糞
縫を造り。清き清風よ撚糞をして盛り。雪舟清とも懸念よ是
をする。夜月是を含みよ其制うぐく味因食の形よあづば。是よ
萬代下してお詔と。妻とも附て客位のひくぬじて。あくとくんさどもの
ふべき。是へぬかでれとてすゞと。あ強せり立奥ども氣く。静間
をかりうきる。まぬかでそむくちくみならがくにづーく。是れ
からう中に媚ありてなまられ。素娥はあじ。雪舟と此女のあすことを記す
もあれがゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふゆふ
をかりうきる。まぬかでそむくちくみならがくにづーく。是れ
帝不見ふれうそ。まきん戯とよも情談會する。詞の鶴等もあ
ど。女何とも思ひぬはなかう。雪舟えうう耳よそりだ。あくとくむらう
國の御多事は寝ひかへぬかへぬかへぬかへぬかへぬかへ
久く。漏れひきよどるあひて身とかくし膏せざる。昔より是女
のかくよへ思へんがふとすがふ。又はねども有りん。かくやうのふ
夫の處乃下よう。又はねども。こよそをやとごりよう。やまと抱き
りて足を凌ぐ。女服で力と極りてこそ我拒ぎ。放たく奮いてひ
ふるゆいのアヌドとつゝ女めらかよたへど。汗ながらて雨の
あくとくひよほをだして。づきうては身は披。身破れ

をうそ。哀しきこととぞ。其聲も慘然もて人の心を懲
ます。庄司あらすみて彼をうながと曰く。女を外すことを害
名の哀しきなり。されば一人のあはれよりかは親屬もうと爲れ。朝
夕に相共く寝よ樂く生むるはまじなむを
泊うあらやかく人よほりへ身もさりてほ。それをうけた保つてあざな
ふへあるもじきんめども。君へはれ勢家とて。我よ勝が婢を
まうむも眼中よあらず。羽毛扇をして樂よ豪華ひきうち。今
雪ふらとよ居まくる貧士ゆく。我身君れふねだらべ。是富貴
をみて愛人と奪ひう。豈丈丈丈夫と言へんや。庄司此語をみて驚き
終よ收て女を立て体拭て云。我一時乃暴惡最後を免まし。我あ
ざく。尊嫂さんと流水よ附て胸中よ清す。じる事なく。我あ
は事よ二会を以て比ねらる猿体。病よからぬとあひておゆるわざり
と。若みひてはてせぬ。其後雪名がまきと云ひてよがく。まち
ねぬなり。女も翁よがまくとひづる矣。故に女が我が面とつみ
なることをうなづく。誓ひも壞とやすとへじ道。良き。あれ猿
きこの腰あらわむぢる。庄司泣く仰くよまうして。日出で殺
生もれこりて犠牲へ黒れだと聲あらび。ふうれ様奴等も休息
よ近座と。それのとうす音うるよひくして月月のたよかと。せ
れを考へて景を察へ。人をひいた女云ひ。うへはる。衣冠うる
ふい。後世義をよきげまれく。がのく天と載る丈夫うてあり
の浦うるをよひよはうせば。足をかうて君れまく。あ縁あ
我よ者纏乃術あり。恐がるよが続とべ。庄司云。我年來射後と
ぬと聞く。身をしてつまざと。婚を謀るの会を。錦部の高向先生
さよあり。容儀の丈へ高く。珠も破へ其本の舊家すと。結と



婚家となり全なましよ取りかげ小蝶云々あるありあらう。
並べ。庄田次郎はひて病くからふあつてうつぬ。まふのとす
てなるとくうけうしゆを用ひ妻矣て甚る遠ひに近さん者
哉。翁日眼痛ありて時経て漸くあらる醫女刀林よりのる向れ女
みれ眼疾を療すとす。翁よ親しくりて紹うなしば。且と猪
に絆を抱き調ひれば刀林より腰部よりて絆おろし小陰も。腰をひらひ
お詫び玉さんや是相あゆの縁をくんとす。おままで。ふにへ古家なり
我顛倒する所なかども今の大庄田へ妻益の紋生は猪もと後者乃
ちよへんを我を欲せば刀林より云々け事ありと云ふ。今へ全く
猪もとと申す。をよと申すと悔て優ゆやうきふどと申すと
めらうとよとがふとえと猪もとをかいそつとぶらばとよだわ
ば我婿よもと恥をいたれのとなりと因と解て。ふにへ大庄田を妻とす
て者宣を通じ寝なく婚姻を調ひる。是よりて大庄田へあらくす
車の沙汰一々うがむん。すゑ生娘衣食欠とす。庄田奴縫とぞと
て小蝶の衣服ノ料ニ貯毛とも。生る新衣を織むる事とぬます。その
紡布等刀林より申す。他が着衣と換ぬかて服用を。異なる者
の今すは異なりとぞ人もいす。夫又云か泉園れ着物登美て夫人
とす。富民あり。親りうりの代うち堅く殺生は年一冬を夏人よ
頃も只生タ伏助ふを以てゆく。他人の殺生をも説まること無
い。女房の後の母の前よ嫁しもうすと出生や一女と具てて出
家よ嫁す。夫夏人よ配うりと。孫よ娶と結ひうらうのまへぬ
別て女房か。まとたとけと家を治めゆく事のね合
候うと。五歳の子とば十とつセともの娘。ひび瘦う

まの夏ふきひえみうちやう。年ごろくおうじて中途み
捨すたへ。わの情ちくねみゆかをども。我の母なる人の志とうに
一類のみふ遙なりてよ絶じんば。今うる長く別きとあらせんが
一五歳記念ふさむか一金紙といをよしてまたれもと。ほと花
にそむて立あら。おとたて回顧て放生のうんじゆとこそまき
处そむきぬかうく枕とよだれ別れ一張の弓をとめり。後半と
足ぞりて水浴の水ととめり空窓なづかのうふた。そ
へたたとうち消するがてくと何をちうべよ參ねどき。其日を
がどひの日とまじ依書たとくにけらと傍よ立をきて羽は執てひ駕
に携へかれせずよ御夕立がくと二年の月日うつ見て。すまんが
たみのまの医日ありと羽とく起て席とくしひ。けらを寄位み立
とせて早膳と供どみく同く対ひ食ともあよ。けら急羽
つわにして白き多み被ド飛出る。食膳へ入り避坐てさればす
をまじて走行。其方と同よにけつまくひ行ひどくはも着立ち
く紀衆の場よりる。傍たる大木の高校は住りてう白き多み有。乞
なさんとえあげてうれしやがてお下り。夏人がよふ事うてうそ。原
の良らと般外人にもよくも夏と疑ひ。おがく其處よ
跡立やすらよ而ま。雄乃國の侍どもあ三人来うりて持くらを
尽こめ取圍みて大よどぎ。其らゆくとて汝がもよ入るもとよ
ぢり向。友人有のまことか。侍もうちにうけづきば。がるあ
あたふほそとをぬがこなき先立日歟。而て其上のうしひと
と友人と中よれぬて行びて。いとまうゆと安きかねし。がくて
床ゆかへ彼渴まるかの座もみびく用る。彼がくねびくす。我
度をあせうが。女ひみれぬひとをあらんと折立よよと雪玉

娘とまひに至る。家を辭をして、舟。山海の旅。宿をあらえて、食。宴。
を。一日。娘と女を。見して、渡を。ゆく。ま娘は。ひく。夕。日。娘は。
娘。にて。へ。ま。既。よ。宿。殿。ゆき。うて。席。よ。進。上。殿。の。聖。よ。う。け。る。
猛虎の竹を。傍。風。咆。吼。と。勢。い。眼。光。人。と。射。り。が。お。ど。く。ふ。
蝶。一同。ア。そ。あ。と。さ。け。び。て。座。よ。能。し。づ。忽。ち。物。と。に。一。築。垣。と。之。
行。ぐ。か。う。ざ。な。り。ぬ。雪。ふ。圓。章。能。と。不。ぞ。ま。げ。と。が。ゆ。く。そ。有。
を。歌。く。追。い。と。ん。も。せ。だ。身。み。安。る。小。袖。ひ。茅。し。と。び。か。が。づ。
脱。の。壳。革。皮。ひ。き。そ。ろ。て。極。の。遠。モ。琴。の。ひ。ざ。う。り。き。落。ら。う。そ。び。え。
か。き。う。ひ。た。う。り。ね。人。と。あ。ま。れ。よ。あ。ま。ま。と。面。え。合。う。る。の。う。き。う。
庄。可。吹。う。今。ハ。何。と。う。ほ。ま。ん。と。我。が。郎。ふ。の。と。だ。こ。ー。策。と。ぐ。く。
雪。ふ。え。や。う。女。が。生。き。を。る。や。ん。雪。ふ。つ。よ。び。女。房。ハ。其。そ。下。免。遠。函。
う。賣。來。る。を。親。た。う。り。の。買。う。り。て。婢。と。う。え。我。こ。ま。く。ら。き。う。く。て。
親。乃。が。行。き。と。つ。妻。と。う。け。ぐ。と。ざ。る。ゆ。く。と。ゆ。き。と。遠。く。さ。波。
う。し。あ。れ。た。う。ぶ。庄。可。吹。う。云。さ。く。あ。う。ち。ん。う。し。虎。の。繪。ハ。釣。革。
女。れ。う。百。濟。川。裏。の。秀。逸。高。向。左。ま。極。磨。な。じ。と。婚。引。の。き。よ。
溥。さ。や。わ。な。う。母。と。て。奉。取。を。离。り。と。と。画。真。の。ま。う。く。見。不。得。
ふ。や。と。游。る。な。う。ば。圓。の。者。ど。も。夏。人。を。れ。か。こ。み。取。て。有。の。う。と。お。
家。も。庄。可。吹。と。大。よ。離。し。雪。ふ。よ。し。ひ。甚。ら。う。と。我。家。又。祖。上方。
城。下。高。ら。尊。敬。し。て。た。く。ら。と。云。範。唐。す。り。れ。を。ら。う。う。ら。と。う。
照。よ。用。る。と。れ。し。波。や。久。く。穀。生。れ。た。く。り。て。箱。と。ひ。う。ば。波。
教。よ。う。向。流。れ。衣。の。用。と。う。て。近。國。よ。命。と。ば。よ。予。家。財。孫。と。よ。
も。う。成。以。く。年。強。う。机。と。お。ち。一。失。玉。よ。う。波。の。箱。大。開。く。

らをつとめ。家への口は溢るゝ者ありと搜す事あらずこと
あらず。其方をつゝれ盜賊ともアヘど。怪しきが設うてあらず
ともも。今回あれどもあまば。世の中懲る所ト挂けられわ
らず。其男ハトモ先とき。本國より人を遣て其身許をもせんと
を白へ皆と毎日掃て散トク。其取扱いは、其身許をもせんと
す。我母とも同ト猶よして。智友の長者がゐる。眷属れ令せ
ゆ。ある數度なしに。其報ぐく彼の家より拂拂はとり。旅
乃山の園守が殺す。耽る依制止せんとの念ありて達せん。我を念と
續て先ぬる寢らをも隠。我身のかまくしてさきく友人
駆け。大ねからず雪色をさそひ出一山面はある。体が魂を連れ去
て御く穀生代とて死生あへてやふ事かうべ。又白狐を捕セラリと
てみうそさむ。ちかがく是人の言ひて。流裏何の齋員となま
き。腰下の皮を縫あひせて。向ひやうとも。絆も離くと服飾
に堪。肌不平たり。年経て。向狐となり。毛皮は捨て表衣と
もれ。更観る。此より。公よ若く流裏の用を紀すと語。も
去とも靈なる。お彼古弓並。他家よどまらず。自ら能く。ひは
の家よ帰る。祚うるる掛画虎威真よ逼りて。我が多く年の妻を
を破る。是皆おの玄殿みて。我が力又及をさうかうと。其妻同
一室のわざう。床の間。雪色の友人。また。其根本の玄殿
狐のふみふりて三人種とのふ機を穿し。其根本の玄殿
れのき。殺生より車ねらり。あれど。ばらと長く庫。轟よね。ね
其位よあく。と無益の孫をもすは。公と潜む。わらと。ばく
くやもありて。再び殺生に。おび。雪色の友人。迷惑。ね。女房
を慕ふんのやまざり。夕と。同じ。いふ。夜。日宵興。く。見ゆ

トクシ

引うけした内うちのつのもとへば芳生アキラレバモト

モモクリナリヒテタ

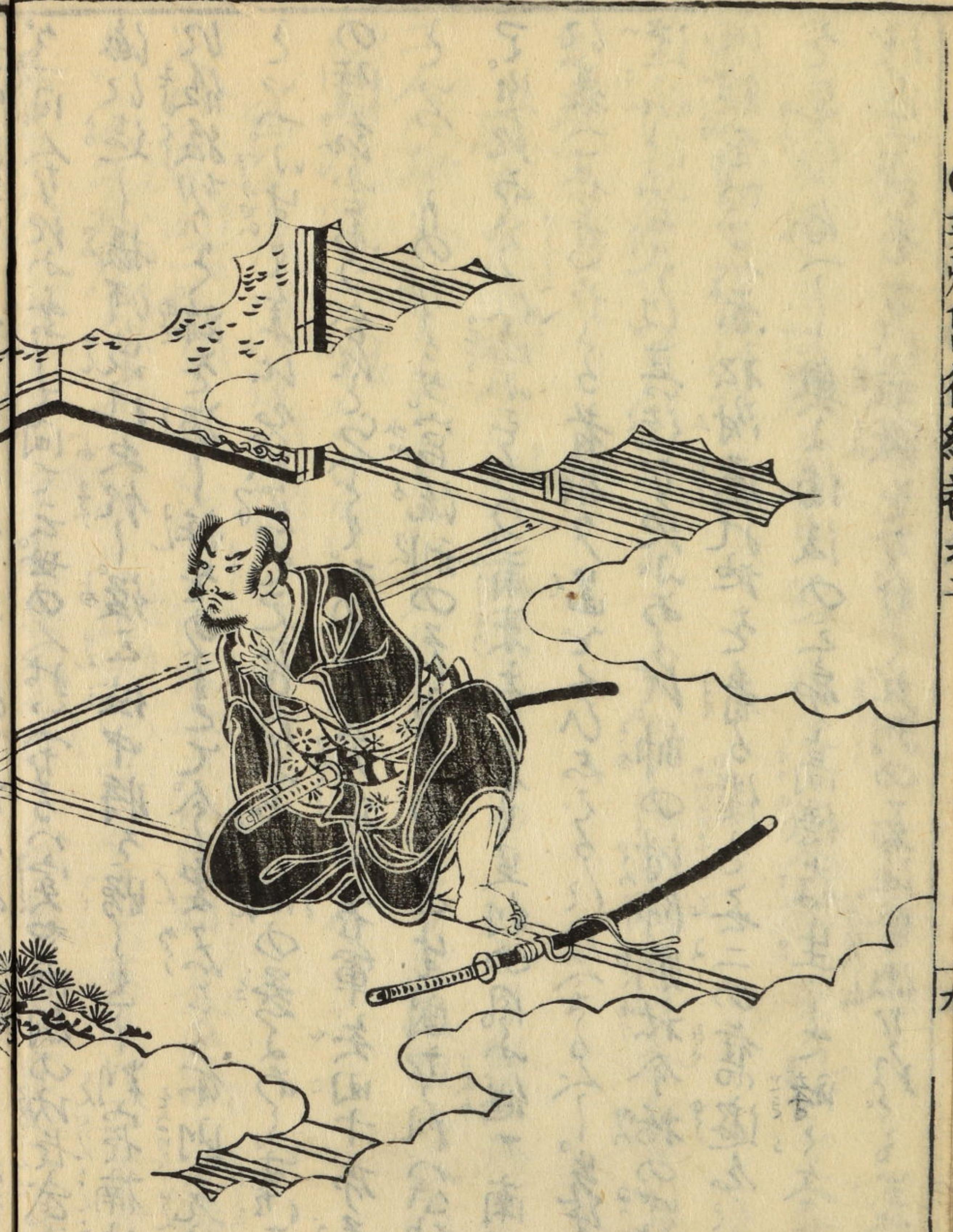
ながれつゝやうらをくわうら紀乃川上の白鳥の室

友人

丽りすひ路を遡て紀の川内たまひまる見我海を
二人の車をとうしるひてえわづこよみうね波根のふの園と
白鳥の園とも呼ふ也謂ふよろとく

（四）中津川入道山伏塚を築ちむる説

足利の世衝一統ならんと。貞治應安比勢到多々の昌ニ極端を棄
とふ人。文武雙全の丈へあもて遠近流傳の人多す。其中に三年があつ
てある流人字多尼房といふ者。其人公卿く人の歌を承認して多言する
が、一日人をひふ事にて問て云。世の人はいかるへ實や。南羽の功を云。正四
海に達し。攝河泉れ更終。後三位中將を賜。第一判官を捕公濟
に般役切く跡を退。位をゆきて。今要名をうか則先まき
とす。小はも年は久絶。久絶をしてをひふ常倫の姿。よすが。大半
の時。餘小争い合ひとくも。がのとく。最初の官軍。矢四十。而義登
とくつりひだり。宮流刑の身。そのとく生國をひびせ。余
は。追ひあう。而小そぞり。爾來土も本も足利の風ふ偃。而南羽川
に暮。其舊やう者朝夕處とひあらしたゞり。先生す
に遣。而後は其後をひかば。帥の洋師則松今柳の中津川
に鎧をひま。赤松附屬れ地を看る。僕と妻二の舊遊をも記
を島根。一。奥又備後の二郷高徳在生。て。時。文
化きて只ある方の衰敗をなげく。九列の菊池勢微なり。もる義登



也。魏國義治の方其初成を以て既ども藝能な命なり。今より蜀
勢の如くば甚度ふして馳集する者の爲同どうせん。賢、愚いと
同の極端實に迷惑の体こそ。世の人の氣を捕と沙汰をうる疾き
弑耳少々へりたれども。先のものから來事す。さうかとあらず。泣きこと
なに難改。そ。麥方を始め世人の軍情成れねがたう。蜀の諸葛參
度も祁山小歩す。必も勝れ術ありにあらず。魏の勢日目ふ洪大あれ
え。しあら五分のふして取説ちどりのとへ。をば吾等とて危きに近き
少勢を強て國家の事体を計る。がる相國の身となりていや
ぞ。ありふ右へ。かく。いうより英雄す。や。是役れ。余わねば敵を許
し。是より。我軍畧足がくれば。是うそけ軍は勝べき。よ。而十から
とつやうへ。其上財物あり無多ありて千萬れかふも。す。老
者支供多。昔士師乃何某よ始て擣の姓を賜り。うへ。葛城主
の外戚ナリ。底。放ありて其姓を繼も。して八代乃至の大御言うへ。校
をうち樟庭に。うへ。自微力ナリ。も。宿軍れ。大指小廬。根
ざ。うへ。き。大地の姓を擣て。大敵を。うへ。軍機を。弑おへ。て。
變に鬼神のやく。こ。と。ど。も。是皆其時小流て。疾疫の中。うつ智
計を練出。一族士卒れ。積患。よう。拒さか。せ。智に。及ばず。不へ。す
をせらて。今ふはうを。へ。又歎。そ。も。日本國を。うへ。て。死をうへ。一
令。まされ。ま。り。へ。よう。け。生。君に。持。げ。若。操。た。ゆ。あ。す。か。を
主。師。よ。旁。へ。恢復の。財。成。ひ。て。宣。利。處。謀。及。の。初。よ。へ。び。ひ。西。海
走ら。へ。處。ひ。う。還。教。す。へ。ま。す。そ。廢。ふ。を。廢。す。へ。う。と。う
へ。時。運。の。と。む。よ。う。あ。り。う。へ。未。政。と。む。け。賞。四。討。均。等。な。う。だ。
射。角。放。英。雄。が。り。と。う。ど。も。家。勢。初。よ。う。微。か。て。ち。民。よ。對。せ。な
既。よ。家。運。傾。く。の。小。家。も。よ。こ。へ。う。し。よ。だ。す。勃。興。そ。う。れ。宣。利。

天命の歴もる。明眼よりくんば勝べきの歎あひだえより軍
利より極りくろとのよあくればひよみて精氣をほし。時
をとひどりゆゑ我れたり。已よ嫡よふりせぬ多病と病よ死
せんよりへ事よ流りと。二十六者みそ綏寧よて下か教記
うちの殘念すれども。今こそアレハニ族の國をもづきぬと
士うめい幼よ喜よ人をもくづべきと。生れたり。ひと黄石公
が直と腹を隨て強良よ取もくろひ。其躊躇よも体用しあく乃
教を張りくろはみたる。椿殿初の大命の歴もく無事にておそれ
あり。絶の命の革をそそぎばれて君よ報じ。公の靈あへ於者
の恩を多ぶべ。但一盤よ楠公と名呼ひて古代樟乃字。俗に椿
と音くらひ。椿の字小混じくもます。叔までも別齋居れ給
於りて時々を家すめゆべ。是れ人情けねは悪じべから
ぞ。をまともばくはせそらす。あ耶の松墓とすら大和紀の物一統
して墨本巣穴なり。今降起乃後の事を成ざんとあづれ
下も手本詣來るちゆきなれば。ひきよも乃成り成ざつた
てまよさんと。枕よとよき角かる本を二つめ出。坐してそむく
手裏に示そ限忍たりと。掛くる長刀を下して宇田弓又授
け。射矢に誠を除して石突を以て直下み宴通し誠を思
ひ。鎌を下すやう。今年次金どうあつて力にまくを宴下と。け
角木貢ひて巣毛。次に向て云。じたわあが主ども。たまよ。其の妻を
通りうちの内をすてて相れぬ。志が強き附へゆくべ。邊の勢が
さうの中外たく化本なり。豫武ふく實をもすもの依どりよすもの
足ひ。すばらじ其兵を撃す。只りと陳よ勝んで一時れまとい

なり。今れ世のやうに實力となくすべきの時よりだ。或へ世ト云
かりて堅くそ通じ。实なる方費たりが如き要卦ある体徳を
モ事本然とべば人に情をなく。初勇氣ありてとじ刈を失ひ
ては勢折け始終を保てし。と書ふ始へ處女の如く後へ脱鬼
の如りと云て。脱鬼へ妻女の既か破身したる所は思ふ言ふる其
法々。棒詮ひを。孫子取て壁をせりと。彭祖歎詮よ語
一は強弩の勢を放つゝありまつて魯缟の所を通さぬと聞
かり是下の如くやひとゆりよる事もとめ勢を用ひもどして。必用
の所よなとす勢をもとものり。じよゆうのアラヒトはり五老が
諫よ流ひもへと。やはせらて蒙を穿の詞よ。次に赤面して公服
せば。彼がしけはざつへ是能も。秋毫事をひらうてはま
にぬりのこゝと彼長刀の鞘をそろべり。ひだつんとする。たま
早く後の一间ふ入まで戸を引立。一重の障へねは密をそ
と突長刀の持奉うち虚然とまば。餘刀なり。がくとて門生殺
人來りぬ彼を。何をななく貌を正へ。そつとま劍を拔す
授へ角をきことなり。と立ちととる。たま湯歩みて再びつ
ておゆ。清平れ世を成用を。大人の儀を害ひ小人の如び
而ちく用ぞ。と安吉の船方に論は。勅止すも。あべし。星意
者が是下と送るの譯。今ようふく絶とぞと。次第忘身入
り画を依て崩れ逃るが如く其姿を去たが。左近が勤作並
筋の人物をば世の人口説か。と。我を遣ひてかくらふ。是
外やうへ早くかひ立と。まよろ其身ふ伏の姿をおおて渡
るの位右防へ左た。細音かしげと。彼よびて其を勤作をさづ

す。何うぞ則ち入らふ一面でと中津川より立つ。壘高くか
げ高門大浦嚴々設け。處にて水火盛まろ舟を無るに乃
鈎轡え挿て火災よ儀へ。門内の白砂入まろに奥ふく。對面に
モ近路より入びく。看門の者より。某の園林と曰脩驗道也
先年密教小參せ。時佛主人より夕伏侍せ。以來奉ふる者
しが。上京の路次懐因院がく推系傳し承ひ次て玉づぐと云
者門をぬてやうて入て蓮とう後より道沿ひるやと一臥よ積み合
立出る事ううれ。年陽正ねども元老である矢田義登なり。
然ども善なうりと。酒を親く。肴飯吃せ。先酒食と陰。
往事ゆきんつきば。住吉院より宿さんば又と氣んと其日へ仰
坐たり。縵してはうりぬりは隔て再び終しにがも疏となく
相待して酒食席を同ぐ吃し。昔よからぬ氣をとて。奉
膳供ともうひてアハ。有羽乃股脇安よ宮の脇近臣をうぬ
ひらはうれ人なり。時うう代うう威儀よびとどと。入るも嘆
息して。宮の謀反対の歟。憂慮ようひて。却て咎め安よゆづ
せ玉よ例のまのうらうを君令なり。いざよ。是もうながく送
紀の自殺ひうれなか。義登云。ひく。日夕ふ禁慳とかく
きざむ和ひだ。ほも。隠居して世よあらざるかくと。我も人情
うすく。至ふと國公をつとひがう。かもしだふひく。義登云
僕の行路も回復の念やあ。おそれ前句のうそを忘れてか祖
あは。月をうござと。彼參ん。爰君すは。已諒玉。今勢州に移
渢た去湯と。夏冬もろひ。正しく補判官と。とて。被て。累正勝
衰。在と。行ふ劍破をする。奥路より。ある處あり。四圍よ義宗



ひそひそ。然事十津川内に変せば。誰とも一とび義を詢う。往
てそぞ朝せばと見るの多からん。いとぞの中うち入道面立つ
まう。義登志を多く待ひよ。此來我館も詮をへきてとてあらず。ふ
むを用ひるべし。義登面温て云。度度身の迷惑は安んじて高
捨ふて。人の禽獸は異なる所を知らやと卑悪言よ及ぶ。へなす
小男びど既よ左刀あかがばさんとやう。自らもまほ改めし胸とさ
もりて云。拙老じまひあひ。近隣よ聞て。實の足利殿れふ。耳も
をひきする。妄様なりふ。伏あつて。我よきんとつゞく家々を
詮を起そなむに。かう論詮よ時を極めて。は兩人快ひたよ。而
あう。只今。你を送る。併も。佐吉防の方へ行て。詮を文へんと。
義登を促して。度を立しめ。且身ハ一個の僕ぬをも具せば。
腸内へよう去あひゆつて。おとづら。もとがく云せ。義登
你と我と舊識たりとつとも。志れ。無隔をうと。君が正ま
遠あり。正まゝ君されば。知るどとつとも。君子ハ正まをううる
易し。義登ふねうて。我つうゆる。不う是正まう。へな云。天下の
善をなせば天下を利と。是君みなら。一かの若狭をなば。不
い害あり。是正まう。近々天臺。諸乱に倦て。活世よへり。蓋
うちみうちうちひをなし。四方みら。兵を勅をもあひたに。你一人
やうねども。父をもとば風かつて。激一の勢とねば。下と震轟に
食業に就て。食ぬど。大兵一たび。隙んで。將軍も。氣ざわれて
も。你へ一日。れ義勢を振て。後まの名。欲よ死をも。笑を食
まん。你がるふいざなまし。と。衆百の人命を落し。まと失
一也。其衆皆你小敵を。考え。日日。世の安寧を。廢棄を。うつて

まばさまたりとを免ます。拳銃にて神嘗あり。廬壁一層人耳
まし。再びけ志をつとむことなし。今我老をと二の力とらひてさ
らじも應せざるがごとく。世の人も又あらんわとぞうつまで已よ
融寺の南門を経て。住吉防も経ちくなんど。かく教も一げ
なれへたと曰道して。経なば。被防も我を妄る人のやうふぞ
だしこそ本經廣の義登。よしくへたをあづみとゞべ。と急急
の尾と古後急の弓。人遠き不そと詞をも掛どせまく切つけ
く。へた急ぬ我のきを接あま。よせう開つ二三度せう。へた
鳥足を迷くもとびてあてうれ切つけ切例し。傷まくか。がく
せれるふ害虫のぞく。聞く你が歎をぬめ。もと刀に血押拭ふ不す
向むかる神祠の義登。一人の農夫歎をぬめにきて。ゆくやう
がきう来るそ笠をぬれ。我アキバ。中津川より新氣の下船なり。處
の單身うて生多ふをうそをゆりせず。アスガクレは拂付せり
とく其体めかすんたゞく。へた想て。いまれざらかのまく。猿知
魚はれは始終を世上よみさん。方次も小無るぞとこれく
りよする事急なるべく。此男制止す。我へ倍ほよあくべ
鹿急くもとひとよ。へたにきくすて。アラハ。あくすく。ヨ
油ひせぐ。其附け男。旅中の囊。う安堵の附書とあくべ。ま
ありそえども。附書付行をたく。何この郡を充経る。某の家
の所部新たきの慰み充よと。所うち。方裏へたまくとも。舊居
多く。中津川へた今京阪の干城をやうすも其車ひいまと
事。多く。がゆく。姓名を技商ととく。赤松刀とねわを攻
て。矢田十郎ふ説くる。村窓の姫を詮とば。矢部も甚

生公論と稱し。是下の本公めじかれば其室よりぞどじ
たがくばれをもうてひそみゆく。け事極経と同体して
中津川よりぬ。入て矢因アキを戎懷アキミと。後防兵アヒメの者より
令じて其地の場因アシカニより埋ち土を繰き石代シダ等をふる。時の人
足を山伏塚ヤマブシツカとよびらる。其後靈蛇リョウザありてくじ縄クモより
生ひるがくら人多し。又靈蛇ありてけむりはよだらけ。怪
とつとも害とひまべ。偶ハナタと見ハシマをそぞる人へ必其志願アヒメと
能アハシマと云アハシマべく。

古今詩詠解序篇第二卷 徒

